

2025年4月13日復活前主日説教

イザヤ書50章4-9節 a

フィリピの信徒への手紙2章5-11節

ルカによる福音書23章1-49節

本日は復活前主日です。教会歴に基づいた歩みとしては、イエス様がエルサレムに入城したことを記念する日です。いよいよ2025年の聖週が始まります。今年も今までと同じように、先週準備した棕櫚の十字架を皆さんに配り、また福音書を長い朗読劇のようにして読みます。ただし、新しい聖書日課になり、旧約日課と詩編が変わりました。本日は、旧約日課を中心に学びます。

ここでは「主の僕」が主題になっています。「主の僕」は、イザヤ書の本日の箇所のほか、49章、52章から53章にも記されている人物です。以前の聖書日課は、52章から53章の部分でした。その意味では、復活前主日に「主の僕」について学ぶという点では共通しているといえます。

本日の箇所は、49章からの続きです。ただし、途中に「イスラエルの回復」（イザヤ49:8-24）、「イスラエルの罪」（イザヤ50:1-3）という部分が入っています。本日の部分は、「主なる神は、弟子としての舌を私に与えた」と始まります。ここにある「私」は明らかに「主の僕」であると思われませんが、そもそもこの「主の僕」が誰であるかは明確ではありません。49章1節にも「主は私に言われた。『あなたは私の僕、イスラエル。私はあなたの中で私の栄光を現す』」とあります。この「主の僕」は個人と考えるとよいのですが、「イスラエル」と呼びかけられていますので、集団とも考えられます。しかし、本日の箇所の「主の僕」は、個人と考える方が妥当です。ここが「主の僕」という人物あるいは概念の難しいところですが、そもそも復活前主日に、「主の僕」に関するイザヤ書が選ばれるのは、その姿がイエス様を想起させるからです。本日の「主の僕」が示す、苦難に直面したときの忍耐は大切な事柄であり、イエス様もご生涯を通してまた十字架の苦しみににおいて、忍耐を示されたからです。

さて、本日の箇所の「わたし」である「主の僕」については、一つの推測があります。それは、この部分のイザヤ書が書かれた時代、すなわちバビロン捕囚が終了し、イスラエルの再建、神殿再建時に活動した、ユダヤ教の指導者ゼルバベルが、この「主の僕」ではないかという推測です。ゼルバベルは、祭司や預言者ではありませんが、ダビデ家直系の子孫であり宗教的指導者です。主にエズラ記に登場しますが、3章2節には「ヨツァダクの子イエシュアとその兄弟である祭司たち、およびシェアルティエルの子ゼルバベルとその兄弟たちがイスラエルの神の祭壇を築いた。神の人モーセの律法に書き記されているとおり、そこで焼き尽くすいけにえを献げるためであった」

とあります。そこには、「イエシュア」という名前があり、これは「ヨシュア」の短縮形で（カタカナ表記ではなぜか短縮形の方が1文字長くなる）、イエス様の名前と同じです。

さて、このゼルバベルかもしれない「主の僕」が指導者とされたのは、「**疲れた者を言葉で励ますすべを学べるように**」するためでした。バビロン捕囚が終わり、イスラエルの人々は再建、ことに神殿再建に努めるのですが、いろいろな意味で疲れてしまっていたのでした。懸命に指導するゼルバベルも様々な批判を受け、忍耐を強いられるのでした。それらの苦悩に関する事柄が6節に記されていると思われます。しかし、彼は、7節以下では、その苦悩もその苦悩を解決するための力も手段も、主なる神様が与えてくださると確信します。「**主なる神が私を助けてくださる。それゆえ、私は恥を受けることはない**」（50：7）、「**私を義とする方が近くにおられる。誰が私と争えようか**」（50：8）、「**見よ、主なる神が私を助けてくださる。誰が私を罪に定められよう**」（50：9）。これらの言葉は、本日の詩編にある言葉、「**しかし、主よ、私はあなたに信頼します、私は言いました、あなたこそわが神、と。私の時は御手にあります、敵の手から、迫り来る者から、私を助け出してください**」

（詩編 31：13。14）と類似する響きがあります。苦難が信仰をより確かなものとするのです。そして、そこに示される確信は、時間と空間を超えて、現代に生きるわたしたち自身も苦難に直面したときに、学ぶべき事柄だと思えます。

ゼルバベルであるかもしれないこの「主の僕」は、主なる神様の示す生き方を受け入れ、そこに起こる苦難も受け入れ、その結果をも受け入れました。そのような人物のあり方が、本日の使徒書にある「**人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで、従順でした**」（フィリピ 2：7-8）にあるような、イエス様についての説明につながったのでしょう。しかし、使徒書に「**すべての舌が、『イエス・キリストは主である』と告白して、父なる神が崇められるためです**」（フィリピ 2：11）とある通り、イエス様の場合は、イザヤ書の「主の僕」を超えています。神の民イスラエルが模範となるためという目的は共通しているのですが、イエス様はイスラエルという枠組みを超えて、直接信じる人を救いへと導くからです。その救いとは、一つの国家や制度、正義や秩序の再建ではなく、この世界ではないまことのいのちの回復です。もちろん、この世界に平和が訪れること、今。争いや苦しみ、混乱がある場所に平和が訪れることを、心から望みますが、わたしたちは、イエス様を信じる時、本当の救いである永遠の命を約束されていることを心に刻みたいと思えます。その根拠となるのが、来週お祝いする、イエス様の復活です。その復活を信じる人がいる限り、世界に希望はなくなりません。そのように信じる人となるために、来週の復活日を心からご一緒にお祝いしたいと思えます。